

## インターネットと金融自由化が変えた英語の環境 ( <特集> 大学の語学教育を考える )

著者	市村 操一
著者別名	Ichimura Soichi
雑誌名	筑波フォーラム
号	57
ページ	41-44
発行年	2000-11
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/8392">http://hdl.handle.net/2241/8392</a>

# インターネットと金融自由化が変えた 英語の環境

市村操一  
体育科学系教授

英語、英語、英語。本当にいやになってしまふ。私個人は英語という言葉は好きではない。でも、しかたがないのだ。最近のメールの交信記録を調べてみても、アメリカ、イギリスはもちろん、香港、韓国、ドイツでさえも、英語で交信である。なかにはドイツの東部や、上海体育学院のような、ドイツ語優位のところもある。ドイツ語での交信のときには、パソコンのわきに独-英、英-独の電子辞書を置いておく。近々に、独-英の自動翻訳ソフトをインストウルさせる予定で、アメリカの店から取り寄せてある。第2外国語も残念ながら英語で読める時代になってしまった（第2外国語の教育は別の意味で、なお重要と思いますが）。コンピューターとインターネットの発達によって、そして貿易と金融の自由化によって、英語が世界語になりつつあるのではなく、なってしまった事実は認めなければならない。この事実を切実に

に感じないで、ネクタイをして働いてられるのは、もしかしたら大学人だけなのではないだろうか。しかし、これから社会に出て行く学生の環境は違う。労働市場の解放によって、国内でもさまざまな国の出身者と仕事をしなければならぬ。今までのように「ここは日本だから、日本語で」とはいかない。

日本人は英語が苦手と言われたが、どうであろうか。国際的に活躍しているビジネスマンの英語力をみると、たいしたものだと感心する。そのような人たちが、最近子供を「どうしても日本の大学で」とは考えなくなってきた。できる子供は、ハーバードやシカゴやオックスフォードに入れて帰ってきってしまうのである。最近、私の友人の息子さんはノースウエスタンを出て、日本の大企業に現地就職をしている。日本の大学は研究だけでなく教育でも国際競争にさらされている。

このような状況のなかで、大学の外国語教育は、従来的一般語学の授業方法と、時間数では不十分なものになってきている。現実の社会の要請に応えられなくなってきていると言えよう。今年の春、3年生の一人が、NHKを受けたいと申し出てきた。幸い私のところで論文を書いた卒業生の一人（山崎信義君、体育MC卒）が、「運動部」のチーフデスクを務めていた。電話にでた彼の最初の言葉は「その学生、英語はできますか」であった。「話せるだけではなく、書けるといいんですがね。インターネットの時代だから」と付け加えた。彼は1984年、ロスアンゼルス・オリンピック要員として、「体育出身で英語が読めること」という条件でNHKに採用された。その卒業生が「後輩を採用したいが、それには話せて、書けることが条件だ」と言う時代になったのである。

春休みに、東京教育大学の芸術出身でトヨタのクラウンとカムリのチーフ・デザイナーを長年務めた大庭寛明氏（昭和36年卒）と歓談した。「トヨタのような世界企業は、将来意志決定機構を海外に出す可能性もありますよ」と言っていた。彼自身、7年もカリフォルニアに住み、豊田と往来していたのである。彼がもう一つ付け加えたことは、企業が学生

を受け入れてから、社内教育で教育していたのでは、コストがかかり過ぎる、ということであった。

### 学生をもっと搾りましょう

私には外国語教育の技術的なことは分らない。技術的には、多分、高い水準にあるのだらうと思う。でも、外国語の教師、特に文学出身の教師が「使う英語」、乱暴に言うならば、「切った張った」の英語の世界の現実を理解して、学生の指導をしていてくれるのかどうか、知りたいと思う。私の経験では大学院の原書講読で、分詞構文を正しく読めない者がけっこういる。仮定法過去になると、かなりの者が間違える。それに語彙が少ない。英語何年やってきたんだ、と思うが、英語教育のどこかが間違っている。簡単に言うならば、もっと搾らなければだめだ。

いまの外国語教育は、スポーツで言うなら、基本練習ばかりで試合をさせていない。もっと本物の英語をたくさん読ませて、テストで苦しめる必要がある。涙なくして一つの外国語を習得するなど、一握りの秀才にしかできることではない。人の能力の現実を見据えて学生を苦しめることが必要なのではないか。それで、学生に憎まれるのなら、いいではな

いですか。あとで、きっと感謝してくれます。英語を、ドイツ語を、中国語をものにさせてやるぞ、と言う気迫が欲しいのです。ドイツ語でウムラウトのついた母音の発音もできない学生に単位を出さないで下さい。大量に落第者がでたら、その始末は教育担当副学長にさせればよいのです。文法は夏休みまでにやっつけて、夏休みには読み物の宿題を与えればよいのではないかと。まず、現在の条件のなかで、もっと学生を搾ってあげよう、というのが第1の提案である。

それでも、現代社会の英語にたいする要求水準を満足させるには不十分であろう。そこで、第2の提案。専門の授業でレポートの提出を英語にすることである。それも、学内のLANを使ってパソコンから送らせることである。これは、やれる先生から率先してやればよい。こまかい文法などどうでもよい。教師にしたところで、学内紀要の英文のレジメをみればひどいものだ。でも、やってみることである。再びスポーツで言うならば、試合にでることである。そして負けること。負けなければ、なにも学ばない。先生がたも、国際誌に応募して、つかえされてみなければ、英文の進歩がないのと同じである。若者にとっては英文を書けることが「must」なのであ

る。(ここでaをつけなくっちゃいけないんじゃないなどと、受験英語的な瑣末を言わずにどんどん書かせたらよい)

パソコンから英文を送れば、学生はインターネットの技術にも、欧文をキーボードで打つこと(Theではなく、Theと一括に打つ)にも慣れるであろう。ペーパーレス社会への対応の準備にもなる。(ここで学長にお願い。大学のインターネット環境の整備に思い切った投資をして下さい)

### 教官が英語を磨こう

第3の提案は「筑波大学内に英語はアメリカ人やイギリス人の言葉ではなく、学問をするための共通語であり、大学卒業者の生きていくための世界語なのだ」という「文化的合意と雰囲気」を作ることである。「ここは日本ですから」というような防衛反応は、教師の側から無くしていかなければならない。

語学は独学で学習できる可能性が高いから、学生に英語は出来て当然という環境を与えることが必要だろう。この点、筑波はどうであろうか。私は横浜の私鉄沿線に住んでいる。駅のキヨスクには英字新聞5紙が置いてある(日本の4紙とUSA TODAY, WALL STREET JOURNALやNIKKEI WEEKLYを置いてあるところ

もある)。電車の中では、英語の経済誌や技術レポートを読んでいる日本の会社員の姿が珍しくはなくなった。日本人と外国人のビジネスマンが交ざって英語で立ち話をしていることも、まれではない。東京の学生はそんな姿に刺激されてNOVAに走るのかも知れない。筑波はシンフォニーや歌舞伎の地方公演が来ないだけでなく、語学に関しても街の文化的影響力がない。

そこで学生に影響力を与えられるのは教官である。筑波の学生の語学力を高める動機づけをするためには、教官が、英語で論文を書くことである。自然科学系はやっている。問題は人文・社会・人間科学の教官である。そのような分野で日本語で論文を書くときは、英語の参考文献をずいぶん並べるのに、英語で書いた論文を英語国から出したことのない教官はずいぶんいるだろう。そのような状況で、学生の語学力を高めようと大学が議論すること自体が、ほんとうは茶番である。(年寄り世代は棚に上げさせてもらおう)

第4の提案。英語のことばかり書いたが、「英語ができるのはあたりまえ。外国語ができるというのは、プラス1ないし2」というエリート集団がいることも、忘れてはならない。筑波の学生をそ

のクラスにするのか、できないと端からあきらめているのか、私は第2外国語に対する筑波の怠惰を寂しく見てきた。個人的願望としては、5%いや3%でもいいから、2・3か国語を駆使して仕事ができるエリートが筑波からでてほしいと思っている。筑波の学生にはそれだけの知性はある。語学担当の先生はビッグマリオン効果を信じて、いっそうの努力をして欲しい。

そして最後に、外国語能力の約半分は国語能力なのではないかということをつけ加えておきたい。英和辞典を引いたら日本語の意味が分からなかった、というようなことは筑波の学生にはないでしょうが、少し心配もある。大学のまわりのコンビニや食堂のコミック雑誌とマンガ本の山。「あれはイギリスやドイツの大学街にはないわな」、と愚考を閉じる。

(いちむらそういち スポーツ心理学)